

東北アジア・シンクタンクフォーラム

ERINA 調査研究部長 中村俊彦

展示商談会を主要なイベントとしてスタートした「中国吉林・東北アジア投資貿易博覧会」は、回を重ねるごとに内容を広め、第6回の今回は主催者提供の資料で数えると全部で86件の会議やイベントが行われた。

その中で、4回目となる「東北アジア経済協力ハイレベルフォーラム」の一環として、「東北アジア・シンクタンクフォーラム」が初めて開催された。開催日時は2010年9月3日(金)9:00~16:00、主幹は吉林省社会科学院、会場

は長春市・南湖賓館の国際会議場であった。

まず特筆すべきは、参加者の顔ぶれである。北京から中国社会科学院国際関係学部主任で「2009北東アジア経済発展国際会議」でも基調講演者を務めた張蘊嶺氏、モスクワからロシア科学アカデミー極東研究所長のミハイル・チタレンコ氏、ソウルからソウル大学国際問題研究所長で韓国外交通商部長を務めた尹永寛(ユン・ヨンカン)氏、ウランバートルからモンゴル科学アカデミー副院長のT. ドルジ氏など22名の発表が用意され、吉林省の陳暁光副省長が開会のあいさつを行った。日本からは小川雄平氏(北東アジア学会副会長、西南大学教授)、坂下明彦氏(日本農業学会副会長、北海道大学教授)、そして筆者の3名が発表した。

このフォーラムは実は、張蘊嶺・中国社会科学院国際関係学部主任の発案で行われたようである。張氏の発言によれば、商務が中心の東北アジア投資貿易博覧会ウィークの中に「知的投入が必要だ」というのがその趣旨である。張氏はフォーラムの冒頭、「中日韓協力の深化と北東アジア協力プラットフォームの構築」について、次のように述べた。

深まる中日韓協力のなかで、3国はFTA締結に向けて引き続き努力を続けていかなければならない。しかし全面的な合意に至るには時間が必要であり、物流、食品安全など分野別の協力を進めていくことが求められる。また、金融分野での協力を進めるとともに、エネルギー・環境などの分野で新しい協力発展の構築を目指すべきである。こうした北東アジア協力を実現するため、中日韓の3カ国にロ・モ・朝の3カ国を加えた「3+3」(あるいはまず「3+2」)の国家間の対話の場を持ち、貿易投資の簡便化、インフラ整備などから重点的に進め、シームレスな「北東アジア・インフラ網計画」を「3+3」部会で定め、資金提供を図っていくことを提言したい。

その後は、10分程度の各種発表が続いた。筆者は「北東アジアの新潮流と日中"東北"協力」と題し、次のような発表を行った。

北東アジア各国の経済バランスが変化し、新しい協

力理念が求められている。最近の中国を見るときに注目したいのは、中国元の弾力化、労働人口割合の減少、社会の高度化をどのように進めるか、の3点である。中国がより高度な社会を実現していく過程で、第1に持続可能な発展に向けた「環境社会」、第2に高齢化社会に向けた「ユニバーサルデザイン社会」、第3に食料の安全を保障する「田園社会」の構築の各分野において、これからの日中協力が展開されていくであろう。今後の日中"東北"交流でも、こうした社会改良に向けた協力に取り組んでいくことを望みたい。

フォーラムは多士済々の顔ぶれでさまざまな発表が行われたが、そのぶん時間に追われ、テーマも散漫で、意見交換の時間も持てなかった。しかし、今後のフォーラムのあり方については、最後の30分を使って意見交換が行われた。なかでも、このフォーラムの発案者でもある張蘊嶺氏の示唆は、これからのフォーラムのあり方を決定づけるものであろう。すなわち、①関係5カ国で理事会的なものを開き事務局を長春に置く、②フォーラムの魅力を高めるためテーマを絞る、③各国・地域で散在する開発計画を結び付けて議論する、-などである。

筆者も意見を求められ、シンクタンクフォーラムとして政策研究を行うことが重要-という張氏の考え方に賛同の意を表し、事前にテーマを絞り込めれば共同研究なども可能になると、今後のフォーラムの充実に対する期待を述べた。

左からM. チタレンコ、陳暁光、張蘊嶺の各氏

